

## 『韓国・朝鮮説話学の形成と展開』

石井 正己

日韓の政治的な対話は硬直したまま進まず、その上、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって民間の渡航も困難な状況が続いている。しかし、この状況の中でオンラインによる国際学会が始まり、学術交流は新たな段階に入ったと思われる。著者はその推進役を果たしてきた一人であり、近年の活躍には目を見張るものがある。すでに、日本語で『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』（勉誠出版、二〇一四年）、韓国語で『植民地朝鮮と近代説話』（民俗苑、二〇一五年）、『近代日本の朝鮮口碑文学研究』（寶庫社、二〇一八年）を刊行し、本書はそれらに続く四冊目の論文集になる。

序章では、朝鮮民間説話の採集と研究を行った人々を朝鮮総督府学務局で働いた教

育者と日韓比較説話学を目指した研究者に分け、本書の目的を次のように述べた。

新たに発見された朝鮮総督府学務局関係者が関わった朝鮮総督府調査報告書、近現代の諸教科書・教師用指導書・趣意書、近現代に刊行された説話・童話集、関連論稿を比較分析することで、韓国・朝鮮民間説話学の形成とその展開を明らかにする。

ここに「近現代」と見えることは重要である。植民地期の歴史的な研究だけでなく、その遺産が一九四五年の解放を経て、現代に及ぼしている影響までを視野に入れていくからだ。具体的には、書き下ろされた序章と終章を除き、既出の論考全一八章を三編に分類して収録する。

まず、「第一編 朝鮮総督府学務局の民間伝承調査と教科書」では、一九〇五年に文部省が行った「童話伝説俗謡等調査」に倣って、一九一〇年代までに朝鮮で実施された四回の民間伝承調査について現存する資料を調べ上げて分析した。その上で、それぞれの報告書に載った民間伝承が朝鮮総督府編纂の教科書に組み込まれた経緯を明らかにする。それだけでなく、植民地期の説話が解放後にも形を変えて教科書に採録されている連続性・非連続性に言及ぶ。

次の「第2編 朝鮮説話・童話集の刊行と比較説話学の展開」は、朝鮮と台湾の説話集・童話集に関わった田中梅吉と佐山融吉の業績を比較した上で、田中梅吉が朝鮮総督府学務局の調査をもとに『朝鮮童話集』と『児童絵本 小兒画篇』を編んだことを論じる。さらに、朝鮮語で刊行された沈宜麟の『朝鮮童話大集』に朝鮮語教育の姿を見て、中村亮平の『朝鮮童話集』や立川昇蔵の『新実演お話集 蓮娘』の改作に触れる。その上で、高木敏雄・清水兵三・孫晋泰による日朝比較説話学の展開を検討する。

続く「第3編 韓国・朝鮮民間説話の近代の変容」は、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）に関連する各種説話の変容を検討する。その上で、日韓共通の説話とされる「瘤取り」「もの言う亀」「三年峠」は、朝鮮総督府編纂の教科書に収録される前にすでに存在したことを論証する。「きこりと仙女」（天人女房譚）もすでに植民地期に存在し、解放後も継承されて現代に至った経緯を話型の変化に留意しながら明らかにする。

本書を貫く方法として特筆されるのは、日本と韓国に残された日本語と韓国語の文献を雑誌や新聞に至るまで博搜し、それらをもとにした実証的な研究を進めた点にある。それは、日本人研究者の植民地主義と朝鮮人研究者の抵抗民族主義という朝鮮民俗学史の図式を再構築する実践であった。だが、『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究』に継いで、本書が日本語版で出された以上は、この成果は植民地研究を進める韓国の研究者のみならず、これまで無関心のままに来た日本の研究者に鋭く向けられていることになる。

思えば、こうした状況は朝鮮・韓国だけの問題ではない。日本では、植民地の教科書は国語科教育史や日本語教育史に居場所がなく、植民地の説話集は日本民俗学史や文化人類学史に位置づけられることはなかった。確かにあった事実であるのに、なかったかのように放置して歩んできたのが戦後の研究であった。その結果、都合のいい歴史観しか構築することができないだけでなく、そのために研究が停滞してしまう。それでは、アジアをはじめとする国際社会の信頼を得ることのできる研究であるとはいえない。

こうした著者のたゆみない研鑽によって、朝鮮・韓国の説話集および説話を収録した教科書の状況とその背後にある思想が明らかにになってきた。これまでの説話集や教科書の研究は一新を迫られていて、口承文芸研究においても無関心ではいられない。だが、二項対立的な図式を克服するには、朝鮮・韓国と日本という枠組みを強固にするだけでなく、それを超えてゆく必要がある。

本書には台湾の説話研究に対する言及が見えるが、北海道・沖縄はもちろん、樺太（サハリン）・台湾・南洋群島・満州（中国東北部）の説話集や教科書にまで視野を広げたい。だが、それは一人でできることではないので、各地域に関心を持つ若い研究者の協働が期待される。そうした研究を進めようとするとともに、本書の方法は良質な研究モデルを提供するにちがいない。

なお、本書評は、二〇二一年六月一九日の『図書新聞』に載った書評に加筆したものであることを記しておく。

二〇二〇年二月、勉誠出版刊

本体一〇〇〇円

（いしい・まさみ／東京学芸大学）